

大会長挨拶

日本放射線影響学会第 60 回大会 会長
国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構 執行役 明石 眞言

日本放射線影響学会第 60 回大会を、平成 29 年 10 月 25 日（水）より 28 日（土）までの 4 日間、千葉市の京葉銀行文化プラザにて開催する運びとなりました。

今回は、第 60 回記念式典を 10 月 27 日（金）に合わせて開催し、原点に立ち戻り、これまでに辿ってきた道を振り返り、今後の影響研究の方向性を改めて考える絶好の機会としたいと思います。日本放射線影響学会大会の千葉市での開催は、1965 年の第 8 回大会、1984 年の第 27 回大会、1995 年の第 38 回大会、2007 年の第 50 回記念大会に次いで 5 回目であり、10 年ぶりとなります。放射線影響の研究者の高齢化と減少が叫ばれる一方、放射線影響の必要性は、益々増大しております。放射線影響研究は、我々人類が放射線を利用し続ける間は止めることができない領域であり、様々な技術や手法を取り入れることが出来る分野です。千葉市は、日本のロケット開発の地であり、1955 年西千葉の東京大学生産技術研究所の糸川英夫博士らは、日本で初めてのロケット「ペンシルロケット」の発射実験を開始しました。また古くは、1912 年 5 月我が国初の民間飛行場が稲毛海岸に開設されるなど、民間航空発祥の地でもあります。医学は言うに及ばず、宇宙や地球科学の若手の研究者も参加したい、という研究領域にする機会になることを願っております。

今回の大会のテーマは、“生命を護るもの、攻めるもの、放射線”としました。医学での放射線利用は、言うまでもなく生命を護るものとしての放射線であり、一方では、生命を攻めるものとしての放射線障害があり、その利用と攻撃からの防護はこれからも続くテーマです。日本放射線影響学会第 60 回大会は、このようなコンセプトのもとに新しい企画も含めプログラムを準備しています。特別講演は、京都大学名誉教授 新山陽子先生（現立命館大学教授）と慶応義塾大学名誉教授 須田年生先生（現国立シンガポール大学教授）にお願いしました。当学会の目的は、基礎研究とその結果の社会へ還元です。新山先生はリスクコミュニケーションがご専門で、東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故後は、ご専門の食品と放射線をテーマにご活躍をされています。須田先生は幹細胞研究の前線におられ、放射線影響研究に新風を吹き込んで頂けたら、と思います。ワークショップ・シンポジウムでは、基礎的研究ばかりでなく世界保健機関 WHO、原子放射線の影響に関する国連科学委員会 UNSCEAR、国際原子力機関 IAEA から専門家をお招きし、国際社会が見た我が国放射線影響研究を議論する機会を持つ予定です。

今大会は、量子科学技術研究開発機構との共催、また千葉市、千葉市教育委員会、日本医師会、ちば国際コンベンションビューロー等からご後援を頂いております。学会は社会とともに歩むことが求められます。日本放射線影響学会では、例年の大会で恒例になりましたが、当大会でも市民講座を開催致します。今年は作家で作詞家でもあるなかにし礼先生をお招きし、放射線と先生との関わりについて、お話し頂くことになっております。先生は戦後日本を代表する作詞家であると同時に、2000 年長崎ぶらぶら節で「第 122 回（平成 11 年度下半期）直木賞受賞され、最近では自ら受けられた放射線によるガン治療のご経験もあります。

今後の研究、社会のニーズに役立つような学問的にも充実し、有意義な学会にすべく精一杯努力させて頂きたいと考えております。会員の皆様のご支援とご協力をよろしくお願いいたします。多くの皆様のご参加を心より歓迎したいと思います。